

正論

車出した新聞記者の死

ソ連邦の解体に見られる社会主義世界の歴史的な変遷のなかで、今日の中国は依然として社会主義体制を堅持し、社会主義の路線をとり、その優位性をなお公式的に唱えている。しかし、その中国はいよいよポスト部小平時代の移行期に差しかかっている。

り、将来の変動は避けられないだろう。

このような時期に、中国報道の任務は、きわめて重要である。「産経新聞」がわが国マス・メディアのなかで、ひと度むらり彩を放った中国報道を再開して、あたりに、周知の広まるべきだが、それは中国で起つての出来事として、偏見なく、中立で、客観的に報道するべきであらう。

東京外語大教授 中嶋 嶺雄

偏向報道に抗した記者魂

氏の功績に多くを身にかけている。その柴田氏が重病の床に臥されてからすでに久かたが、本紙の

うか。
「一月、いよいよ逝き去られた柴田氏は、その意味で、たんに『産経新聞』の記者としてばかりか、わが国の中国報道史の重要な一ページを飾った手であったといえよう。

中国報道史に残る柴田穂氏

柴田氏を再考する

柴田氏は、一九六〇年代初期に、このソ連邦の崩壊を予言したこともあって、晩年はむしろ北朝鮮の分析のメスを加えていたが、なんといつも氏の最大の貢献は、激動の文化大革命期の中国報道にあった。



柴田穂氏五四年に東京外国語大学中国科を卒業された私（左）と柴田氏（右）の思い出と題する長編論文を紙上で助

で進んだ。
しかし、そのような真実の報道のゆえに、氏は一九七九年九月、中国から追放されたのである。帰国直後の海難をまよめた『報道』が、この追放の理由であったといえよう。

が、周知を首相の指導下で説いた。柴田氏は、この時代に、中国から追放されたのである。帰国直後の海難をまよめた『報道』が、この追放の理由であったといえよう。

マを断断としたものである。これら二回の経験にたいして、昭和五十四（一九七九）年度の現世主義が与えられた。真実の報道にたいして、このように努力がなされたのである。

のものがターナーであった当時、氏は各藩第一のベネチアに、現代の理論「歴史」にたいして、その論議を導き出したのである。一九七二年（一九六七年）が、柴田氏が、この最初の著作である『毛沢東』は少ないと思いが、こうした論議があったからこそ、その直後の北京特派員時代の氏の報道は、ひと

今日、いざ、わが国の中国報道は、かなりバランスのとれたものになっているが、当時、文化大革命の「毛沢東思想」に共鳴するものの、真実の報道というシャーマリスとの使命にたいして、もっぱら北京の産経新聞にたいして、記者が、この追放の理由であったといえよう。

（サンケイ新聞社、六七七年）は、『東京新聞』の伊藤久光氏との共著『ドキュメント』の『三〇年』の経歴を、六八年（一九七〇年）に、北京特派員としての氏の記者魂の記述が、この追放の理由であったといえよう。

始めた。
この著作は、全五巻の『毛沢東の軌跡』（サンケイ新聞社、七九年）として刊行されたが、その手厚さ、歴史的資料の豊富さによって、中国で歴史的に高く評価されている。大

柴田氏は五四年に東京外国語大学中国科を卒業された私の先輩でもあり、また、同じ中国専門科として、公的にも私的にも、柴田氏との関係が、私にたいして、存在を認識したのは、文化大革命以前、以前の六四年間に遡る。当時、中ソ論争が大きな出来事として注目され、そのなかで、柴田氏が、この追放の理由であったといえよう。

文化大革命が歴史の過程として、中国社会に大きな変革をもたらしたことが明らかになった。柴田氏の存在は、その意味でも、わが国の中国報道史の重要な一ページを飾った。

柴田氏の存在は、その意味でも、わが国の中国報道史の重要な一ページを飾った。